

組織行動研究

No. 3

編集後記にかえて

●私はどちらかといえば“夜型人間”である。とくに夏休みなどという時にはひどい——明け方までモゾモゾ起きていては朝刊を読んで寝る、というような日が何日も続いたりする。今日もそのたぐいである。ところでさきほど読んだ朝刊(8/18)によれば、東南アジア歴訪中の福田首相は、昨日マニラで「福田ドクトリン」なるものを発表し、わが国の東南アジア外交三原則として、①日本は軍事大国にならない、②物心両面の相互信頼関係を築く、③「対等な協力者」の立場から各国の自主的努力に協力し、インドシナ諸国との間でも相互理解の醸成を図り、東南アジア全域の平和と繁栄に寄与する——と表明したという。政治・外交に限らず、何においても、最近は「地球的観点」や「世界的視野」からの対処が強く要請されつつある。“実践的性格”を色濃く運命づけられた「社会心理学」や「組織行動学」においてもしかりである。

●本誌第3号も、よりマクロな視点——社会全体や文化とのかかわり——を重視する研究プロジェクトを中心に編集した。まず私たち日本人同志の「対人的社会行動」の機構を吟味し、それを包み込み規定しているところのわが国の「文化」の構造を考究し、そして「世界のなかにおける日本および日本人」の直面する諸問題を

検討していこう——という展望である。いずれのプロジェクトも始まったばかりであり、本号での報告も予備報告の域を出ないが、私たちの「問題意識」といったものを理解していただけたらうれしい、と思う。

●8月22日朝、今日も雨である。さきほどの朝刊(朝日二面の「ひと」欄)は、「アルコールと薬物に関する国際シンポジウム」に來日された、ロスアンジェルス地区検視局長トーマス・野口博士の談話を載せていた。「……アメリカは、活力にあふれた社会ですが、一面、くいつめ者の社会です。警察に追われた者、経済的に食えなくなった者、私なんかも日本の医局の徒弟制度にいや気がさし開き直ったんです」——アメリカに長く住んだ経験のない人には、博士のこの言は、おそらく、通りいっぺんにしか伝わらないだろう、と思う。日本人が日本以外の国で“生きて(喰って)いく”ことのかに大変なことか。日本人の「国際化」などというけれど、実はそこには気の遠くなるような道のりが横たわっているのだ、と私は思う。「開き直り」も「国際化」も“ギブ・アップ”して、良き国日本にUターンしてほぼ二年、「終身雇用」と「年功序列」のシステムに安住(適応?)し埋没(同化?)しつつある自分を反省することしきりであった。(南 隆男)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学研究班モノグラフ

組織行動研究(第3号)

編集 佐野勝男・南 隆男

KEIO STUDIES ON
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND
HUMAN PERFORMANCE No. 3
SEPTEMBER 1977

〒108 東京都港区三田2-15-45
発行 慶應義塾大学産業研究所
電話 (453) - 5640 (直通)
〈昭和52年9月15日〉

〒104 東京都中央区八丁堀3-21-4
印刷 株式会社 国際印刷
電話 (551) - 3930 (代)
〈昭和52年9月10日〉